優秀賞

# 寄り添う言葉

千葉県　太田 恵理子

ドルを売って、円を買う仕事をしていた。生活が全てお金に染まり、友達や家族と過ごす時間を無駄と感じた。稼いでも、稼いでも、もっと、もっと欲しくなる。月の半分は会社に泊まり、働いた。大金を扱う自分が偉くなった気がして、周囲を見下す日々を続けた。故郷を忘れ、やがて身近な友達を殆ど失った。最後は身体を壊し手術室へ。これが私の失敗物語。

天井に機材が反射する無機質な銀色を見つめると、心にガツンと音がした。麻酔から、ちゃんと目覚めるだろうか。この病気を乗り切ることが出来るかな?「生きる」ことを、初めて本気で学んだ。

病室に戻ると悲しくて仕方なかった。誰かに頼りたい。けれども、これまでの言動を鑑みれば、今更連絡を取れないことは、自分がよく分かっていた。それでも寂しさが募る。泣きながら大学時代の友達に、一行だけメールを打った。

「入院したよ。」

数時間後、仕事帰りの制服で友達は会いに来てくれた。昔と変わらぬ穏やかな物腰で、へこんでいる私に寄り添ってくれる。温かい言葉をシャワーみたいに、一つ一つ、ゆっくりと、かけてくれる。優しさが心にしみた。

「私、ずっと最悪の私だったよね。」

「うん。でも、それも含めて恵理ちゃんじゃない?」「必死だったんだよね。」

寄り添う言葉に救われて、私はもう一度、「生きる」ことを学んだ気がした。

現在、私は中学校の教員として働いている。授業中に生徒が笑う。私も笑う。心から笑うと、校舎も笑っている様な気持ちになる。

生徒は、みんな宝物だ。誰かが挫けそうな時に、そっと寄り添える。そんな教師を目指し、今日も学んで生きていく。